

新井豊美さんの言葉

—尾道・瀬戸内・塩飽島—
しわくじま

平岡敏夫

新井豊美さんの詩人としての大きな業績については、私などが語ることはできないが、50年も中断して詩集を出しはじめた詩壇の外の私に、新井さんはいつも暖い言葉をかけて下さった。今年（2012）1月22日、朝刊に新井さん死去の記事を見たときの驚きは忘れられない。近くに住む日頃親しい詩人の井川博年さんに電話したら、その日の通夜にいっしょに行こうということになった。西国分寺の駅に着くと井川さんと同時だった。二人で新井さんのあまりにも早い死におどろきながら、東福寺に向かった。齋場に飾られた新井さんのお写真は、死のかけのない凛とした美しさであった。新井さんが私などのもにつねに言葉を下さったのには、新井さんが尾道生まれということがあったと思う。四歳のころには東京に移り、赤穂、日向、岡山にも住んだと『新井豊美詩集』（現代詩文庫114、思潮社）にあるが、私は尾道以外は念頭になかったものの、瀬戸内海を通じて新井さんとながっていると思うようになった。新井さんも尾道をつねになつかしがついていたようだ。私は瀬戸内のはば中央、瀬戸大橋近くに散在する塩飽諸島（広島）に生まれ育った。幼いころから対岸の多度津と尾道の間に定期航路があり、志賀直哉『潜水術と瓢箪』にもこの航路が出てくる。多度津、その隣りの丸亀の沖に塩飽の島々が点在しており、この尾道・多度津航路が

象徴するように、尾道生まれの新井さんと塩飽生まれの私はつながっている（私の父も尾道近くの生まれ）。そんなふうにならずとって、新井さんの私への言葉をいつもいただいていたのである。もちろん私のひとりよがりということもあるだろうが、少しずつ新井さんの言葉を、そのままというわけにはいかなかったが、部分的な引用を交えつつ、新井さんの記憶と共に私なりに書きとめておきたいと思う。

新井さんから最初にいただいた言葉は、最初の詩集『愛情』（1954）の多くを収めた詩集『塩飽』（2003、鳥影社）であった。（塩飽本島が郷里のよし、私もお近くの尾道の出身ですの、とてもなつかしく、嬉しく拝読させていただきました）とまらずある。塩飽本島でなく塩飽広島なのだが、本島が塩飽諸島の中心であり、江戸時代・自治制の天領として塩飽勤番所（現存）も置かれていたので、塩飽本島とまず思うのもつともかも知れない。ともあれ、右の新井さんの言葉は、尾道と塩飽島とを結びつけた最初のものであった。（長い文学活動の中で、初心の詩をつねに保ちつづけられ、五〇年を一冊にまとめられたお仕事に感銘をお受けしております）というはげましの言葉は以後変わらず続いた。

「現代詩手帖」(2012.3)の新井豊美追悼特集で、福間健二「弔辞」(詩形式)は新井さんのようなすばらしい人に励ましてもらい、何と恵まれたことだったでしょうとうたい、(ぼくだけではありません。／新井さんが、多くの詩人たちの書くものを／しっかりと読み、／励ましの言葉をあたえつづけた。／そのこと、／だれもかかない／清潔さとやさしさがあってこそ／できたことですね)と続いている。そのとおりのことが、実質最初の詩集である『塩飽』にも与えられたことになる。(清潔さとやさしさ)——新井さんにもことにもふさわしい美しい言葉である。さらにつけ加えておけば、この追悼特集で横木徳久氏が(新井さんを見てみると、詩人や批評家としての資質以上に人間としての深さが大切であると思わずにはいられない。少女のような瑞々しい感性と母親のような寛容さを併せ持ち、そのうえに批評的な厳しさを兼ねそなえている人だった)と書いている。横木さんは(こんな知性と気品のある母親がいたらいいなという憧れを私は抱いていた)とも加えている。話が進みすぎてしまったが、ここでは新井さんが私に与えられた言葉を具体的に紹介することであった。

次は「浜辺のうた」(2004 思潮社)に対しての便箋3枚に及ぶ手紙である。ご主人の入院など雑用に追われて半年がたち、(夏が来て「浜辺のうた」の呼び声に、ようやく落ちついて拝読するよるこび)とあって、その命名のとおり、(浜辺からのうたは、懐しい瀬戸内海が眼に見えるように甦つて参りました。海も、浜も、瀬戸内海ならでは、他のどこにもない味わいがある、それは、そ

の地に生まれた者でなくてはわからないものかも知れません)とある。やはり瀬戸内海である。(海も、浜も、)の読点の打ち方にも瀬戸内に寄せる新井さんの思いは表れている。先日、「帆・ランプ・鷗」の詩人丸山薫の話をするために豊橋へ、さらに伊良湖岬まで行ったが、その絶景に感嘆したけれども、(同じ海でありながら、瀬戸内海とは全く違う海だ)という気がしたとある。私の書く(海、浜辺、その島々の姿こそ、瀬戸内海そのものである)と思つたともあり、瀬戸内に生まれた者同士ひいきはめと他の人は思うかも知れない。ついで、新井さんは作品に及び、「子を喚ぶ母の声」「浜辺言葉」「浜辺のうた」「浜辺ありけり」「故郷の廃家」「山桃」(二篇)「秋吉台国際芸術村」などがとくに印象深く、(中でも「山桃」は、文語のひびきの美しい、すばらしい御作と存じました)という言葉を残して下さっている。

文語詩を書く人は今の詩人にはいないけれども、(文語のひびきの美しさは、いずれ必ず再認識され、甦つて来ると存じます。是非是非、このような御作を今後も拝読させていだけたく)とあるのには大いに励まされた。奇抜なメタファが多く、読解不能、感受不能の詩に溢れていると思ひ、五十年ぶりに詩を書き出していた私は、現詩壇の有力詩人のこの言葉は、今もむろん忘れ得ないものである。秋吉台には参加できなかったが、友人(福間健二さん)から私の講座のことを聞いた、いつか話を聞かせてほしいとまで書いて下さっている。福間さんが「弔辞」で新井さんが多くの詩人たちに励ましの言葉を与え続けているとうたっていることはさき引いたが、時代遅れの私などもその多くの詩人たちの中に加えて下さったのだ。

新井豊美『シチリア幻想行』（2006 思潮社）のお礼状を出したところ、その返礼と私の詩集『明治』（2006 思潮社）のお礼状をいただいた。（時代の出来事と塩飽の歴史とを重ね合わせた叙事的展開を大変興味深く拝読）、塩飽の島々が、地中海文明の中心としての中世シチリアのような、重要な役割を果たしたことを知り、感銘」というくだりは重要な言葉だと思う。さらに（一つの詩作品としては「明治」の印象を美しい抒情としてうたわれた御作がことに印象深く」という一節があり、これは序詩「明治」についてのありがたい言葉だ。◁明治文人＞の四文字熟語が、山村暮鳥を思わせて楽しく」とあって、学識と遊びの心のためものと言って下さっているのは少々こそばゆい。◁うらなり＞は現代詩としても見事な御作、集中の最高傑作」とほめていただいているのは、ほかならぬ新井さんの言葉であるだけに、孤軍フロントウに近い「坊つちやん」擁護にとつて、力強い援軍として忘れられない。佐藤泰正氏が「明治」を評して（とりわけ「うらなり」と題した一篇などは、すぐれた「坊つちやん」論を草した著者ならではの魅力ある作品であろう）（『現代詩手帖』2006・11）と記しておられるのを思い出す。

ところで、詩集『夕暮』（2007 鳥影社）については新井さんの言葉がない。スクラップブックを何度繰っても新井豊美の名前が見つかからない。お送りして返信のない詩人は少なくないが、新井さんは必ず言葉を発せられたはずなのに『夕暮』にはない。この詩集は思潮社にお願いしようとしていたのに、気後れしていつの間にか他社から出してしまったものだが、それは（夕暮）そのものから

来ているところがある。『源氏物語』以来、近代の鷗外「舞姫」なども含めて、（夕暮）には男女の出会いがあり、性愛のイメージも避けたいが、私が気後れするのと新井さんが詩集『夕暮』に沈黙をまもることは背中合わせのようにさえ思えてくるのだ。（清潔さとやさしさ）（福岡）、（知性と気品）（横木）といった新井さんのイメージと詩集『夕暮』との溝。これは考え過ぎで、何か事情があつて返信しそびれたのだ。そう考えても、半年もたつてから礼状がくるということもあつたのだ。ことは詩集『夕暮』の評価にまで及んでくるが、ありがたい感想を何人もの詩人から頂戴している中で、ここではひとつお許しを願つて、最高のものと思う池井昌樹さんの言葉——（これまで頂戴したどの詩集よりもこの一巻が私は好きです。一気に読み了えてからも暫く、感動が去りませんでした。『ものあはれ』を超えたノッピキナラヌいのちそのものがまるで探れたての野生の果実のように転っている。新鮮で純で艶めかしい。大切に、致します）を引かせていただく。この池井さんの言葉そのものが美しい詩である。

ここで、『夕暮れの文学』（2008 おうふう）の返礼に新井さんの言葉を見出した。（とても魅力的な御本で、これまでにない魅力的な（一、二字不明）を拝読させていただき、ここから御詩集『夕暮』が生まれたことを実感）とある。『夕暮』にふれてはいるが、何かよそよそしい感じがしないでもない（暑中見舞の葉書）。あちらで新井さんに会つて『夕暮』への言葉がなかったと言えば、やさしく微笑するだけかも知れない。

『蒼空』（2009 思潮社）には便箋4枚の言葉をいただいでい

る。(昨日は8月15日で、この日をとと思い定めて、御詩集を拝読)。
 (丁度、TVでは戦没者の慰霊祭が中継されており。御詩集1の部の「蒼空」「そら」「蒼空・飛行機」と拝読してゆきながら、涙が止まらなくなりました。これらの御詩集は、私がこれまでに読んで来た戦争の詩の中でも、最も心に残る作品と存じます)。実はこの新井さんの言葉を写している今日が、2012年8月15日である。

あの毅然たる美しさの新井さんにして、涙が止まらなくなったとは。相手の詩を思つて下さる心がなければ決して生じない涙だろう。(敗戦の年、私は10歳でしたので、殆んど何もわからず、ただ悲しかったのです。眼の前には青い汚れない瀬戸内海が広がり、「蒼が蒼になり／蒼が黒になり／黒が真赤になり／青タン蒼一色の海」とうたわれた「青タン海」は、私の中にある、その日の瀬戸内海に通じているように思われます)とある。(瀬戸内海)が二度くり返されているように、新井さんの敗戦、悲しみ、涙には私の詩と同様、(瀬戸内海)が広がっていたのだ。

〔空〕という御詩の中、陸軍幼年学校入試の作文に少年が書いた「空ノヤウナ広イ心ノ持主ニナリタイ」という一行、この少年の心を、先生はずっと大切にされて来られたことが、御詩を拝読して、とてもよくわかりました)ともある。新井さんに(先生)と言われると困ってしまうが、十五歳で敗戦を迎え、生涯教師だった私だからと甘受している。(さらに、どの御作も詩として実に見事な作品揃いで、啄木、光太郎の見事な変奏、口語と文語の自然な響きあいの美しさを、すばらしく拝読)と続く。詩集『蒼空』は第12回小野十三郎賞最終候補となり、その抄が「樹林」(2011・2)に掲載されたが、

もし新井豊美個人選などの賞があれば受賞したかも知れないほどの言葉である。この新井さんの言葉を記録しておきたいためにこの小文を書いているというほどだが、つけ足しがあつて、『北村透谷』『北村透谷と国木田独歩』への礼言と共に、(10年ほど前、早稲田の文芸科で非常勤を3年ほどやっていました頃、学生の前で『楚囚之詩』の全文を読上げたことがあります)とある。新井さんの透谷最初の詩集全文朗読の情景が浮かび、透谷学徒としてはまことにうれしい。また「内部生命論」は「女性詩」を書くのに大変参考になったという言葉も、これからの新井豊美論には大事な視点になる。この便箋4枚の手紙の結びは、(まだ暫く暑い日が続きますでしょう。でもつくつく法師やひぐらしの声も聴かれるようになりました。どうぞお躰を大切にお過ごしになりますように。かしこ) 8月16日)である。この稿書き継いで今日がその8月16日。何の奇もない手紙の結びと思われるだろうが、2年前のこの8月16日、新井さんは生きていて、80歳の私を気づかって下さっていたと思えば、まだ聞えてこないつくつく法師やひぐらしの幻聴の中で、新井さんをつかしまむ感傷をかくすことはできないのである。

『蒼空』については、杉山平一氏からお葉書をいただいたている。(御詩集『蒼空』をお送り下さい、ましてありがとうございました。多く愚痴になりがちの戦記ものでありながら／題名「蒼空」のごとく、さわやかで啄木のヒコキもうれしく／小生もむかし一年軍務に服しましたので／一人一人がなつかしく／さわやかで／うれしく／御礼までに)が全文であるが、97歳で五月死去された杉山さんの言葉は新井さんの言葉と重なってくる。杉山氏と並んで平林敏彦氏の葉

書が貼ってあり、(見よ、今日も、かの「蒼空」に、私の敗戦の日は二十一歳の下級兵士でした。同世代はもはや大半鬼籍の人になりましたが、今は風化しきれない戦争の影を詩の中にとどめたいと願うばかりです。「蒼空」と名付けた御詩集、ありがたく拝読させていただきまし」とある。さきごろ平林氏を囲むにぎやかな会が報ぜられたばかりだが、敗戦の日、10歳だった新井さん、21歳だった平林さん、15歳だった私。(戦争) (敗戦) (蒼空)、それらが重なってきて、いただいた言葉と共に、かなしく、なつかしく、よみがえってくる。

二〇一二年の年賀状には(私こと、一昨年から体調を崩し入退院をくりかえしていましたが、今後しばらく左記住所で療養することとなりました)と印刷され、横浜市青葉区の住所が記されていたが、一昨年からは二〇一〇年ごろ、その前年の夏に、新井さんは「蒼空」への言葉を書きつけて下さったのだ。右の年賀状からわずか3週間後の二〇一二年一月二十二日に新井さん逝去の記事に接する。手許には、「朝日新聞」「毎日新聞」「読売新聞」の計報切り抜きがあるが、毎日(は)広島県生まれ、読売(は)広島県出身とあり、朝日はそれにふれていない。3新聞共通しているのは、2009年から11年まで日本現代詩人会会長を務めたところ、このことに関し、やはりふれておかねばならないことがある。日本現代詩人会は会長新井豊美、理事長八木幹夫の時期、新井さんから入会を推荐されたことがあった。しかし、役員会か総会か、今は時代もちがうから、所定の手続きによるべしの声が出た。当然と思うが、入会申込みには会員1名、理事1名の推挙が必要で、私が知っている

会員・理事は新井さんと八木さんのみ。この二人は推薦者になれない規定。私は断念せざるをえず、これについて新井さんから御懇篤な言葉があったが、今は見当たらぬ。新井さんはこんな形においても目配りされていたのであり、感謝のほかはない。

「東京新聞」夕刊(2012・1・26)の「大波小波」欄は「ある女性詩人の死」を掲げた。(詩人の新井豊美の訃報を知ったのは水雨の朝だった。知的な詩を書き、とりわけ女性詩に関する論評には定評があった)と書き出し、「現代詩手帖」昨年十二月号に(故郷に 近い瀬戸内海を描いた「島々」という詩が収録されているのを見ると、最後まで彼女の中から「島」のモチーフは消えなかったのだろう。この詩には靈魂がざわめいている。死の予感があったのか。硬質な評論を書ける希有な女性詩人がまた去った。(船)と結んでいる。この詩の題は「島々 わが瀬戸内海」である。最後まで新井さんの中から(瀬戸内海) (島)のモチーフは消えていなかった。

よこたわった雲は島の上空にすんなりと足を伸ばした
豊かな腰をもうひとつの速い島の頂が支える
ゆるやかな三角形が完璧な晴天を保証している

暗く感じられるほどの青

曖昧さのない透徹した深度(以下略)

尾道・瀬戸内・塩飽島とつながる新井さんの数々の言葉は、私にとって忘れることの出来ないもの、と繰り返すしかない。(8・16)